

RIBEN XIANDAI CHANGPIAN MINGZUO SHANGXI

日本

现代长篇名作赏析

○由同来 编著

南开大学出版社

日本现代长篇名作赏析

由同来 编著

南开大学出版社

天津

1988 年度、1994 年

图书在版编目(CIP)数据

日本现代长篇名作赏析 / 由同来编著. — 天津: 南开大学出版社, 2014.10

ISBN 978-7-310-04689-8

I. ①日… II. ①由… III. ①长篇小说—小说研究—日本—现代 IV. ①I313.074

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 240601 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人: 孙克强

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502700

*

天津市蓟县宏图印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2014 年 10 月第 1 版 2014 年 10 月第 1 次印刷

210×148 毫米 32 开本 18.5 印张 530 千字

定价: 36.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

前 言

在中国大力推进现代化进程的当下，我们正身处于一个纷繁复杂、令人眼花缭乱的时代。尽管物质生活得到了极大的丰富，但由于生活节奏加快、社会竞争日趋激烈和生存压力的陡增，社会中充斥着急功近利、无限诱惑和浮躁空虚之风。为此，像王蒙这样的著名作家和有识之士都大声疾呼，要人们多读经典，以拂去社会浮躁之弊端。因为阅读博大精深的经典名著能够正历史之谬误，安浮躁之内心。正如美国教育家赫钦斯所言：“经典著作乃是每个时代都具有的当代性书籍”。可以说，每一个民族、每一个时代的精神之精华都浓缩于其中，它是人类文明的积累和文化思想的结晶，它蕴藏着人类对真、善、美的共同追求。品读这些经历过历史和时间长河无情检验与淘洗的经典名著，我们可以穿越时空，与伟大的心灵进行对话；可以发现自身的渺小与卑微，从而使灵魂得到净化。从某种意义上讲，经典名著，就是超越时代、超越种族、超越文本的不朽之作。她可以提高人的精神境界，滋养陶冶人的心灵与性情，使人变得更加美好与善良。对于以日语为专业的莘莘学子，阅读日文原版的经典名著，无疑还是提升语言能力的最佳途径。这些文学大师笔下的语言，都具有生命的灵性，别具一格，自成一体。

日本现代文学中的长篇经典名著虽不能说是浩如烟海，但也可谓汗牛充栋、不胜枚举。为了便于大家在有限的时间里能够读到经典和精品，在《日本现代长篇名著赏析》一书中，从日本现代作家中选取了十位具有世界影响力的作家的经典名著各一篇，并从中节选出精华。这些文学名著，在日本都多次被改编成电影搬上银幕。它们分别为：日本现代文学巨擘、被称为日本国民教师的夏目漱石的代表作《心》；1968 年度、1994 年度诺贝尔文学奖获奖者川端康成和大江健三郎的

《雪国》与《个人的体验》；被誉为“小说之神”的志贺直哉的《暗夜行路》；日本无产阶级文学代表作家小林多喜二的《蟹工船》；曾多次获得诺贝尔文学奖提名、在日本作家中第一位获得美国文学艺术学院荣誉会员称号、赢得海外广泛赞誉的唯美派代表作家谷崎润一郎的巅峰之作《细雪》；日本先锋文学的一代宗师、素有“日本的卡夫卡”之美誉的安部公房的《砂女》；日本天主教文学的奠基者远藤周作的《沉默》；被誉为日本战后文学旗手的大冈升平的《野火》；曾两次被提名为诺贝尔文学奖候选人的三岛由纪夫的《金阁寺》。

夏目漱石的代表作《心》，是一部探究剖析人类自私之心的力作。作者以剥笋抽茧般的手法，深刻剖析了“人变成恶人”的内在机制和根源，那便是自私。自私催生贪婪与嫉妒，进而令人失去理性而作恶。小说还将主人公先生的自杀与明治时代的精神与命运结合在一起。通过对 K 和先生自杀真相的探究，鲜明地揭示出：先生的死不单单是对好友 K 的赎罪，更是与明治时代与明治精神的诀别，是对西方个人主义价值观中所蕴含的自私之心及人性之恶进行的无情鞭挞。希冀日本在文明开化过程中能够克服西方个人主义价值观中存在的弊端，寻找出一种既能实现自己的“自我本位”，又不以牺牲他人的“自我本位”为代价、也不与东方伦理道德相背离的生存方式。**志贺直哉的《暗夜行路》**，被著名评论家小林秀雄盛赞为日本现代文学史上的不朽之杰作。这部呕心沥血十六载创作而成的小说，虽无气势恢宏的历史叙事，也无波澜壮阔的社会斗争。但它以“微言大义”和象征的手法，描写了具有严重自我中心主义意识的主人公时任谦作，命途多舛。他经历了由母亲和爱妻两个女人的“性过失”所造成的心灵创伤，在如暗夜行路的人生旅途中艰难跋涉。最终在伯耆大山之旅中，抛弃了心中的执念，彻底宽恕了爱妻直子；完全克服了自我中心主义，走向了成熟。并找到了一条由顺应自然、天人合一来摆脱人生困境的精神闲适的自由快乐之路。从而，心无所执地告别了漫长苦涩的人生暗夜，迎来了期待已久的璀璨夺目的人生黎明。我们从中依稀地可以窥视到庄子那种追求顺应天道、归真返璞、超然物外、清静无为和宁静平和的超脱的人生哲学。谦作的人生探求，也为今天那些“争名于朝，争利于

市”的世俗人们，提供了一条获得精神解脱、消融苦闷和寻求平和心境的途径。**谷崎润一郎**的《**细雪**》，以生花妙笔，细腻地描绘出日本传统文化中的博大精深与独特的审美情趣。运用优美婉约的关西方言，以不夹杂任何理性判断的审美视角，客观地描绘出关西地区上流社会中的丰富多彩的风俗文化和价值观，表现出了超越性的审美观照。特别是通过对大阪船厂的富豪蒔冈家族的衰落以及四姊妹的描写，让人们看到了那个时代父权制的分崩离析，领略到了在新旧价值观交融、过度以及新旧婚姻观的碰撞中出现的女性众生相。如贤妻良母的鹤子，集传统与现代于一身的幸子，温柔妩媚而又传统守旧的雪子，敢作敢为具有现代女性觉醒意识的妙子。《细雪》中的所有这一切，构成了一幅宏伟的色彩斑斓的日本社会风俗画卷，展现在读者面前。**小林多喜二**的《**蟹工船**》，以真挚的感情和丰富的想象力，运用画面感极强的富有穿透力的语言和形象贴切的比喻，使用血淋淋、震撼人心的事实，逼真地描写了“蟹工船”上地狱般的劳动场景和工人们的悲惨境遇，深刻揭露了日本帝国主义和资本家相互勾结残酷压榨劳动人民的滔天罪行，鲜明地刻画出工人阶级的觉醒过程，讴歌了工人阶级组织的罢工斗争和他们敢于砸烂人间地狱、为铲除资本主义剥削制度而奋起反抗的大无畏精神。可以说，作者在“蟹工船”这一有限的舞台上，将无产阶级与资产阶级的矛盾，无产阶级的觉醒，无产阶级反对资本家的斗争，日本社会、政治、经济以及国际关系等重大问题有机地结合在一起。大大增加了小说反映的深度和广度，深化了主题的思想性，它不愧是一部划时代的无产阶级文学的代表作。**川端康成**的《**雪国**》，以抒情哀婉的笔致，讲述了一个追求挚爱而无果的凄美徒劳的爱情故事。而贯穿其中的，则是“东方的虚无”主题。作者在小说中将驹子和叶子当作一个人物的两个分身来描写，采用了虚实相间的处理手法。实写驹子对生活、爱情的执着追求，是为了印证她的徒劳。她越是倾注全部热情去追求，越是更深地陷入虚无之中。这从一个侧面证明了岛村的“活着就是徒劳”这一虚无思想。而虚写叶子，是为了点明她是一个非现实的存在。特别是通过雪夜大火中叶子死去时场景的描写，彰显出她已经超越了生死，升入银河获得了永生。这又从另一个侧面

解读出“生即死，死即生，虚无即超脱”这一东方的虚无思想。在《雪国》中川端极力要诠释的就是：世上的一切都是虚妄的，人的所有努力都是徒劳的。只有超越生死，与自然融为一体，方可获得永生。大冈升平的《野火》，运用大胆的艺术虚构、细腻的心理分析和富于逻辑而知性的语言以及逼真生动的描写，深刻地阐明了“战争就是死亡的盛宴”。通过日本兵自相残杀、吃人肉这一骇人听闻场景的描写，进一步揭示出：战争灭绝人性，导致道德沦丧。从谴责战争的残酷性和非人道这一点来看，《野火》不失为一部反战小说。但作者把主人公枪杀菲律宾女子仅仅看成是一次“事故”，也充分暴露出他对战争认知的错误一面。大冈没有对战争的性质加以界定，混淆了正义与非正义战争的性质。在他眼中，主人公单凭杀人不吃人肉这一点就可以成为“天使”。倘若依照这种强盗逻辑，那些双手沾满被侵略国人民鲜血的日本侵略者，岂不个个都可以摇身一变而成为“天使”？三岛由纪夫的《金阁寺》，采用手记的创作手法，通过内心独白的方式，讲述了主人公沟口火烧金阁的心路历程和他为何要亲手将美毁灭掉的内心秘密。在描写沟口痴迷于金阁之美的同时，作者巧妙地在金阁的意象中叠加上了他对日本战前与战后历史的认知。可以说，永恒、绝对的美——“金阁之美”在小说中就是一种隐喻，它象征着日本战前的天皇制国体。沟口为了获得金阁永恒绝对的美，不惜铤而走险，决定烧毁金阁。三岛借助沟口这一人物，通过对金阁意象以及火烧金阁寺动机的提炼与加工，充分地表达出他对战后民主主义体制的不满和要求恢复战前天皇制国体这一政治理念和诉求。他1970年为何要以极端的方式为激进的政治目的而自杀谏世，我们可以从沟口为拥有金阁之美而火烧金阁寺的疯狂举动中找到答案。对于隐藏在这部作品中的三岛由纪夫的右翼思想必须要加以警惕。安部公房的《砂女》，是一部意蕴深刻、内涵丰富带有浓厚寓言性质的小说。作者既没有对日常生活和社会现实进行简单的肢解，也没有将现实生活沦为符号化、概念化而加以政治口号化的图解。而是植根于生活的细节，从中捕捉具有深刻寓意的事物与事件加以描写，在不失生活质感的同时，传递出作者对资本主义社会中异化现象的思考和反思。小说通过中学教师仁木顺平失踪故

事的讲述，强烈而不动声色地传递出：改革者只有立足于异化的社会现实中，寻找契机，突破现状，进行变革，才能探寻出一条切实有效的改革之路，才能走出疏离孤独异化的世界，构建出一个美好理想的社会。远藤周作的《沉默》，堪称战后日本文学中一朵奇葩。小说字里行间充满着背叛与忠诚、宽恕与悲悯、东方与西方思想之间的碰撞。在作品中，一直叩问神的沉默的主人公洛特里哥司祭为拯救日本的信徒免遭酷刑而死，最终选择了脚踏基督圣像而弃教。应该说，他虽然脚踏了圣像，但丝毫也没有放弃宗教信仰。他在“用跟以往不同的形式爱着那个人”。在他看来，耶稣只不过是欧洲威严可怕的父性形象变成了富有慈悲之心的慈祥温和的母性形象而已。这无疑也是远藤周作对耶稣的理解。作者将其一生的宗教体验投射在洛特里哥身上，终于寻觅到了他所理解的日本化了的母性的耶稣形象，那就是：耶稣以弱者永恒陪伴者的姿态始终陪伴在信徒身旁，与其分担着痛苦而同行。从而，完成了将基督教本土化的进程。大江健三郎的《个人的体验》，以象征与隐喻的创作方法，通过细腻描写主人公鸟经由回肠九转般的心灵炼狱完成内心转变、决定为孩子做手术并将其抚养大这一看似平淡无奇的故事，具体形象地揭示出：只要我们能够像主人公鸟那样立足于现实，认真关注、审视和反省自身的日常生活，并且对其重新进行建构，就完全可以在平凡的日常生活中确立自己的理想，寻觅到人生的真谛和实现自我的价值。可以说，这部作品给那些因在平凡琐碎的日常生活里找不到自己的理想而陷入孤独绝望之中的日本现代青年，开出了一剂“依靠自我完善来拯救自我灵魂、治愈心灵创伤”的良药。

本教材在选文时，特别注重所选小说必须要具有典范性、文质兼美、主题深刻及富有文化内涵和时代气息。力求通过阅读这些文学大师的经典名著，让读者能够捕捉到反映在文本中的时代脉动和日本文化的精髓。本书由课文（精彩章节的节选）、该小说梗概、相关资料（日本评论家对该作品的相关评价）、作家介绍和笔者的详尽的赏析文章组成。它是上大学日语专业四年级学生和研究生为对象而编写的，亦可供有相应日语基础的学习者使用。

在编写过程中,本书参考了国内外部分学者的最新研究成果,在此谨致谢忱。这部教材得以出版,应该由衷地感谢南开大学出版社外语事业部张彤主任的约稿。在选题和撰写过程中,张彤老师都给予了许多中肯的建议,在此表示深深的谢意。

天津外国语学院日语学院 由同来

2013年11月

南开大学出版社网址: <http://www.nkup.com.cn>

投稿电话及邮箱: 022-23504636 QQ: 1760493289
QQ: 2046170045(对外合作)

邮购部: 022-23507092

发行部: 022-23508339 Fax: 022-23508542

南开教育云: <http://www.nkcloud.org>



App: 南开书店 app



南开教育云由南开大学出版社、国家数字出版基地、天津市多媒体教育技术研究会共同开发, 主要包括数字出版、数字书店、数字图书馆、数字课堂及数字虚拟校园等内容平台。数字书店提供图书、电子音像产品的在线销售; 虚拟校园提供 360 校园实景; 数字课堂提供网络多媒体课程及课件、远程双向互动教室和网络会议系统。在线购书可免费使用学习平台, 视频教室等扩展功能。

目 录

第一課	こころ	(夏目漱石)	1
一、	本文		1
二、	梗概		43
三、	関係資料		44
四、	作家案内		48
五、	鑑賞		50
第二課	暗夜行路	(志賀直哉)	61
一、	本文		61
二、	梗概		94
三、	関係資料		95
四、	作家案内		100
五、	鑑賞		102
第三課	細雪	(谷崎潤一郎)	112
一、	本文		112
二、	梗概		162
三、	関係資料		163
四、	作家案内		168
五、	鑑賞		170
第四課	蟹工船	(小林多喜二)	180
一、	本文		180
二、	梗概		210
三、	関係資料		211
四、	作家案内		213
五、	鑑賞		215

第五課 雪国	(川端康成) 225
一、本文	225
二、梗概	267
三、関係資料	268
四、作家案内	272
五、鑑賞	274
第六課 野火	(大岡昇平) 284
一、本文	284
二、梗概	316
三、関係資料	317
四、作家案内	320
五、鑑賞	322
第七課 金閣寺	(三島由紀夫) 331
一、本文	331
二、梗概	374
三、関係資料	375
四、作家案内	380
五、鑑賞	382
第八課 『砂の女』	(安部公房) 392
一、本文	392
二、梗概	423
三、関係資料	424
四、作家案内	428
五、鑑賞	430
第九課 沈黙	(遠藤周作) 439
一、本文	439
二、梗概	499
三、関係資料	500
四、作家案内	503
五、鑑賞	505

第十課 個人的な体験.....	(大江健三郎) 515
一、本文	515
二、梗概	561
三、關係資料	562
四、作家案内	565
五、鑑賞	569
主要參考資料	578

第一課　ころ

夏目漱石

一、本文

一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と言いたくなる。筆を執っても心持は同じことである。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという葉書きを受け取ったので、私は多少の金を工面して、出掛けることにした。私は金の工面に二三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病氣だからと断ってあったけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親達に勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分らな

かった。けれども實際彼の母が病気であるとすれば彼は固より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰ることになった。折角来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので、鎌倉に居つてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。従つて一人ぼっちになった私は別に恰好な宿を探す面倒も持たなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長いなわてを一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにくつでも建てられていた。それに海へは極近いので海水浴を遣るには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思う程、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしていることもあつた。その中に知つた人を一人も持たない私も、こういう賑やかな景色の中に包まれて、砂の上に寝そべって見たり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不図した機会からその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と違って、各自に専有の着換場を拵えていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所といった風なものが必要なのであつた。彼等はここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここでおはゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てることに

していた。

二

私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであつた。私はその時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上って来た。二人の間には目を遮ざる幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であつたにも拘わらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴っていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組をして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だつた。私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私のじっとしている間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠し勝ちであつた。大抵は頭にゴム製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆の前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにこごんでいる日本人に、一言二言何か云った。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人が即ち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守っていた。すると彼等は真っ直ぐに波の中に足を踏み込んだ。

そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼等の頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻って来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼等の出て行った後、私はやはり元の床几に腰を卸して煙草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生のことを考えた。どうもどこかで見たことのある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人が想い出せずにしまった。

その時の私は屈託がないというより寧ろ無聊に苦しんでいた。それで明るく日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋まで出かけて見た。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽を被って遣って来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追い掛けたくなった。私は浅い水を頭の上までは跳ねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかった。私が陸へ上って雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った。

三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じことを繰り返した。けれども物を言い掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。周囲がいくら賑やかでも、それには殆んど注意